NVC Monthly

同好会ニュース

寝屋川映像同好会会報
第２５号（２０１１０６０３）
発行　竹 田 幸 男

■　嵐山・嵯峨野撮影会開催

新寝屋川市映像協会としての初めての合同撮影会を、６月８日（水）に実施しました。朝方には雨の心配がありましたが、快方に向かうとの天気予報で実施決定、有意義な嵯峨野での撮影会となりました。人出が少なく撮影には好都合な条件でした。例会での作品発表が楽しみです。お互いの作品を鑑賞することで技術向上が図れるのではないでしょうか。

例会の窓

■　平成２３年６月例会

日　時　平成２３年６月３日（金）
　　１３：３０～１６：３０
場　所　寝屋川市民活動センター４階　こども室
出席者　新井　天野　石田　小笠原　佐伯　竹下　竹田　谷　田渕　（9名）
欠席者　梶本　竹嶋、田口　（３名）　　（５０音別　敬称略）

例会次第

１．各会員の最近の活動状況・情報交換

梶本さんはお見舞いのため欠席。竹嶋さんは帰省のため欠席。田口さんは会議のため欠席

２．報告・連絡・協議事項

（１）大阪アマチュア映像連盟総会報告（竹田さん、小笠原さん）

・６月２日（木）の総会に出席。

・傘下の１１クラブのうち２クラブが脱退（会長の高年齢、メンバー減員）

・映像フエスティバルは作品本数に関係なく、原則として、１クラブ１７分割り当て。

・当同好会は、当面はお手伝いをすることにしているが、来年は出品したいですね。

（２）映像協会撮影会の案内（再確認）

・実施日　6月8日（水)、雨天の場合　6月10日（金)。

・場　所　新緑の嵐山・嵯峨野

・当会は、８時00分寝屋川発、快速急行　最後尾車両で移動（石田さんは別行動）

・参加者　8日の場合（天野、新井、小笠原、佐伯、竹田、谷）6名

10日（予備日の場合（天野、新井、石田、小笠原、佐伯、竹田、谷）7名

・各自弁当をご持参ください。

（３）映像フェスティバル会場等に関して（竹田さん、新井さん）

・当同好会の結論を持って、寝屋川映像にはかって決定したい。

・先月の当同好会の例会で種々検討した結果も踏まえて同好会としては「アルカスホール」に決定したい。

・２Ｆは閉鎖、１Ｆ200座席、150人の来場者があれば問題なし。

・費用については、下記の条件であれば実施が可能と思われる。

・出品料　5分以内　3,000円、5分超え　4,000円とする。

・昼食、打上会の費用は各自持ちとする。

・実施は平成24年5月の平日（たとえば金曜日）

・イベントとして来賓者の紹介をしてはどうか。

（４）忘年会プロジェクトに関して（石田さん）

・映像寝屋川の大口さんと連絡をとり推進中。

・宴会部長は石田さん担当。

・日時　12月11日（第二日曜日）第一日曜日は場所が取れないため。

・場所　寝屋川市市民活動センター　４Ｆ和室（第１２会議室）

・時間　12時開演（10時30分から準備）16時終了。

・内容　映像寝屋川のこれまでのやり方を踏襲する。

ゲーム等はこれからの検討課題。景品は全員にわたるよう配慮する。
・会費　4,000円（景品とも）。
（５）編集講習会（竹田さん）
・日時　　6月20日（月）　10時～16時（場所は17時まで予約）
・場所　　寝屋川市総合センター　第５会議室→４階第９会議室
・対象　　ビデオカメラ購入予定者（購入はハイビジョンカメラとなる）
　　ハイビジョンカメラの所有者、その他希望者
・内容　　ハイビジョン映像の編集。下記テキストを参考に編集できるまでに。
・テキスト　Windows Live ムービーメーカー ビデオ編集テクニック（各自購入）
・会費　　２００円　場所代と資料代見合いとして
・ＯＳ　　編集可能なＯＳ　Windows Vista／Windows 7
（６）「NVC　Monthly」の記事執筆者の件。
・次回担当　新井さん。

２．作品発表
（１）スイス「雨のハイキングと高山植物」修正版　　天野さん　７分４５秒。
・8分20秒を7分45秒に短縮した。
・メインタイトルからＢＧＭを入れた方がよい。
・逆光をうまく使っている。
（２）「人生の扉」　天野さん　　７分３０秒。
・太陽の映像を逆転映像にしたものをエンディングに使った。
・思いをテーマにして歌にのせている。発想がよい。
（３）「激打！」　竹田さん　　９分５９秒
・文化連盟60周年記念式典会場で平成22年6月6日に撮影したもの。
・5人が撮影した太鼓演奏をマルチカメラで一つの作品にまとめたもの。
・5つの画像を一本にまとめるにはタイミング合わせの技術が必要。
・出演者が挨拶している場面から、聴衆に移る画面は、逆方向を見ている聴衆を細工して対面方向にして違和感をなくした。
（４）「かたなの博物館」　新井さん　　９分５８秒
・5月22日に小笠原さんと再度「かたなの博物館」を訪問した。
・我が家の刀の鑑定をしてもらった。なかなかの名刀と判明。折られているのを残念がっておられた。
・展示物のショウウィンドウを開けての撮影許可。部屋に上がっての撮影も許していただけるとのことであった。
・刀研ぎの各工程を撮らせてほしいと要望したところ、願ってもないことであり、こ

ちらからも是非お願いしたいとのことであった。

・弟子の教育には動画は素晴らしい教材である。と、大変乗り気であった。
・撮影の都合に合わせて、研ぎの工程を変更することも検討したい。
・近いうちに、真津かたな博物館館長から撮影日等の連絡をいただける。
・「真剣（世界に誇れる名刀）　真剣（匠の技）」　小笠原さん　6分1秒
・研ぎの場面に、師匠の説明の声を入れるとよい。
・最後のテキストはナレーションも加えた方がよい。
・Google Earthやルートラボの動作画面を録画したファイルの拡張子は？
　　（次月の例会で報告）

（５）「兵庫県立フラワーセンター」　小笠原さん　　６分２５秒
・ズームの画面が多すぎる。
・前作品も含めて、「声の職人の」ナレーションが小さ過ぎる。設定で大きく調整できる。

（６）「お嬢様の結婚式・お孫様の映像」　佐伯さん　長い映像を早送りなどで再生。
・記念になる映像なので、編集して残されるとよい。
・編集に興味を持たれたと拝見。精進を期待したい。

４．次回例会
・７月１日（金）１３：３０～　於：寝屋川市市民活動センター　４階こども部屋。
・カメラ担当：天野さん。

私 と 映 画 2

新 井 正 直

２００７年からケーブルテレビで取り貯めたＤＶＤを観るに当って、映画の歴史すなわち、ハード面の歴史や作品面の歴史をＤＶＤのリストで確認し、整理しています。

・・・・・ハード面の歴史・・・・・

私が生まれた時(１９３７年)は、オリジナル画面でモノクロのトーキー映画時代で、それ以後、モノクロからカラー化とオリジナル画面からワイド化と変化する時代が来ました。

モノクロからカラー化が始まったのは、１９４０年頃だと言われています。しかし、カラーフィルムの開発と価格を下げるのに約５０年を要し、完全カラー化が完了したようです。カラー化の初期には、フィルム価格が高いため、パートカラーと言われた映画が、ＤＶＤにも三作品ありました。
また、ＤＶＤをすべて観ていませんが、１９５７年頃に完全カラー化と初期のワイド化がほぼ終っているように感じています。

最近は、ハイビジョンカメラで、撮影し、フイルムに焼き付け映写機で映写するか、プロジェクターに転送〔フィルムの運搬費の削減〕し、映写する方式に変っていると聞いています。

・・・・・作品面の歴史・・・・・

取り貯めた映画ＤＶＤには、エジソンが１８９１年に発明した映画の初期には、オリジナル画面でモノクロのサイレント映画であり、そのサイレント映画のままでは、ケーブルテレビで放映されず、洋画で、オリジナル画面でモノクロのサイレント映画に字幕と音楽を追加したもの、チャップリンのキッド(１９２１年)等がありました。

邦画では、１９３５年の『乙女ごころ３人娘』〔主演　細川ちか子〕・『サーカス五人娘』〔主演　大川平八郎〕・『女優と詩人』〔主演　宇留木浩〕・『三人妻　妻よバラのやうに』〔主演　千葉早智子〕の四作品がありました。いずれも成瀬己喜男監督で、１９３３年に映画製作へ参入したPCLの作品です。これらは、私の生まれる前の作品で、すべてオリジナル画面でモノクロのトーキー映画でした。

私が幼少時は、太平洋戦争の真っただ中で、学校の名前も、尋常小学校から国民学校に替わり〔現在放送されているＮＨＫのおひさまと同じ時期〕、多分戦争を主題とした映画が製作されたと思います。ＤＶＤには、ありませんでした。

戦後、最初に公開された映画は、佐々木康の『そよかぜ』で、ＤＶＤにはありませんが、並木路子さんの主題歌『リンゴの唄』は、私の子どもの頃よく歌っていました。

アメリカ占領下では、映画もGHQに管理され、制約されたと思います。しかし、今井正の『青い山脈』１９４５年と黒澤明の『わが青春に悔なし』１９４６年などが制作され、１９５１年サンフランシスコ講和条約が締結され、ＧＨＱの映画検閲か廃止されました。時代劇が復活し、戦争映画が制作された。ＤＶＤにあるのは、市川崑の『ビルマの竪琴』

１９５６年と嵐寛寿郎が演じた『明治天皇と日露戦争』１９５７年の二作品でした。

　また、この当時から国際映画祭に作品をエントリーし、作品が次々と受賞した。それらの作品で、ＤＶＤにあるものは、ヴェネツィア国際映画祭グランプリを受賞した黒澤明の『羅生門』１９５１年、溝口健二の『西鶴一代女』１９５２年　『雨月物語』１９５３年　『山椒大夫』１９５４年と連続受賞した。また、衣笠貞之助の『地獄門』１９５３年は、カンヌ国際映画祭でグランブリを、黒澤明の『七人の侍』１９５４年は、国際映画祭銀獅子賞などの受賞がありました。

　この時代(１９５０-１９７０)から各映画会社は、シリーズものを制作し始めました。
東映・・・・新諸国物語　笛吹童子・紅孔雀、任侠もの
東宝・・・・ゴジラ、三等重役、サラリーマン、社長、喜劇　駅前、無責任、日本一の男、若大将
松竹・・・・男はつらいよ
日活・・・・渡り鳥、流れ者
大映・・・・大魔神、ガメラ、悪名、座頭市物語、兵隊やくざ、忍びの者、眠狂四郎、陸軍中野学校などがあります。
ＤＶＤには、シリーズで一部がない作品があります。また、この時代(１９５０-１９７０)にヒットした作品は、一部を除いてＤＶＤにあります。

　この時代(１９５０-１９７０)以後、テレビの急速な普及と娯楽の多様化に圧倒され、映画産業全体が斜陽化し、映画会社もテレビなくては成り立たなくなった。

　また、１９９０年代から２０００年にかけて、漫画、アニメ、ゲームなどと連動した映画作品が増えて、制作委員会方式が一般化し、テレビ製作会社などの映画参入があり、タレントがCMからお笑い、ドラマや映画に出演したり、監督をしたりすることになり、どれがドラマか映画かはっきりしなくなりました。
　また、最近は、ストーリが読めない映画も増えてきました。私の年齢とのギャップかな・・・・・。

　次回は、私もビデオを制作する者として、映画作品を見て参考になったことを記載したいと思います。

ＡＶＣメモ

ワウ・フラッター

竹 田 幸 男

むかし、場末の映画館などで映画を見たとき、その音楽や台詞が震えて聞こえていたのが、また何ともいえない哀愁があり、味があるものではありました。それがワウ・フラッターというもので、最近、何かの拍子に突然この言葉が記憶の中から飛び出してきました。今やデジタルの時代到来とともに、ほとんど死語になってしまった言葉です。映画は１秒間に２４枚のフィルムを間欠的に送り、送っている時間に比べて停止している時間を長く取ることによって連続した映像を映写します。回転シャッターの閉の期間にフィルム送りをすることでフィルムの移動を見えなくします。このようにフィルムを間欠的に送る一方、フィルムが音声再生ヘッド（光学式と磁気式があった）を通る部分では、フィルムの動きをフライホイールを使って滑らかに連続走行させて、連続した音声を再生させるのですが、間欠走行部分の影響がヘッド部分に伝わると震えが発生することになります。

テープレコーダでは同様にテープ送りにムラが出ると再生周波数が高くなったり低くなったりして、その、ゆっくりとした変動をワウ、早い変動をフラッタといいましたが、どのくらいの変動周波数で分類するかのはっきりした境目はなかったようです。テープの場合は３，０００ヘルツのテストテープを再生し、各瞬間の周波数を分析し、再生周波数の瞬間的な変動を３，０００ヘルツで割った比率を％で示した値で示し、普及品では３％くらいまでは許されていたと記憶します。

ＬＰやＥＰのレコードにも同じ悩みがあります。しかし同じ円盤でもＣＤ（コンパクトディスク）は、デジタル化されていますから、ワウ・フラッタという言葉は実用上は不要です。ＣＤの音は味がないといわれますが、このような雑物がないのが、味がないことにつながるのでしょうか。

ワウ・フラッターだけではなしに、再生音の周波数ずれもアナログ再生機器の悩みでした。テープレコーダーの場合はテープ巻き径の小さい巻きはじめはテープテンションが強く再生周波数が高くなる傾向があります。音楽家は数ヘルツのずれも敏感に感じ取ると言います。デジタルの世界になって、映像でも、音声でも、再生したものはいったんメモリーに入れ、メモリーから読み出すときは周波数が安定したクロックで読み出すため、再生周波数は安定し、ワウフラッターも周波数偏差も「検知限界以下」とされ、もはや死語となってしまいました。数百円で売られているデジタルオーディオプレイヤーでも、ワウ・フラッターを感じることはありません。 ■